

奨励研究報告書

研究課題

近世後期大坂豪商・廣岡久右衛門家と茶の湯

愛知県豊田市文化財課

倉林 重幸

研究の目的

本研究の目的は、近世後期の大阪豪商・加島屋廣岡久右衛門家（以下、「加久」）における茶の湯の実態について、「大同生命文書」、「廣岡家文書」、「小石川三井家資料」、「北三井家資料」等の古文書及び文献資料を用いて明らかにすることである。加久の古文書類は、近年発見・整理が行われ、近世後期における同家の経営活動、近代における同家の金融・保険業等への進出と経営活動が解明されつつある¹。

近世茶道史研究において、豪商の茶の湯は、史料制約もあり、解明の進んでいない分野のひとつといえる。また、三井家²、鴻池屋善右衛門家（以下、「鴻善」）³、平瀬宗十郎家⁴等の各豪商を題材にした先行研究は、各家の道具蒐集・処分への視点が中心で、会記の分析等、各家の茶の湯の実態の解明は、必ずしも十分とはいえないものであった⁵。

そこで、本研究では主に加久の史料を用い、同家の茶の湯への関与を概観する。他方、三井文庫所蔵の古文書類を用い、現在収集し得る限りの加久の茶会記（自会記・他会記の双方。以下同じ）を博搜し、加久の茶の湯の実態を総合的に明らかにするための基礎的作業を行う。

分析対象史料

(一)「大同生命文書」（大阪大学大学院経済学研究科所蔵）

二〇一一年に大同生命大阪本社から大阪大学大学院経済学研究科に寄託された約二五〇〇点の史料群で、廣岡家の主導により設立された加島銀行・大同生命の経営を示す近代史料を中心に、近世史料を含むものである。筆者は、二〇一三年までに行われた本史料群の整理・目録作成・解題作成に従事し、近世後期の加久における茶の湯への関与を確認してきた⁶。本研究に際し、本史料群における茶の湯関係史料の再検討作業を行った。

(二)「廣岡家文書」（神戸大学経済経営研究所所蔵）

二〇一五年から二〇一九年にかけて加久ゆかりの個人から神戸大学経済経営研究所に寄託された史料群で、近世史料を中心に約八五〇〇点に及び、「大同生命文書」とルーツを共有している史料群と考えられている。筆者は、本史料群の整理・目録作成・紹介に従事し、近世後期加久の茶の湯に関する研究成果の一部を発表してきた⁷。本研究に際し、「大同生命文書」と同様に、本史料群における茶の湯関係史料の再検討作業を行った。

(三)「小石川三井家資料」（三井文庫所蔵）

三井文庫所蔵の三井本家・連家関連資料のうち、「小石川三井家資料」に分類されている、近世後期から近代にかけての各種茶会記の全てを通覧し、加久に関連する茶会記の抽出を試みた。具体的には「諸家茶事会席写」（小石川一三九一。全二冊、一八一四～四五年）、「諸家茶事控」（小石川一三九一。全一冊、一八四六～五七年）、「諸方茶事控」（小石川一三九三。全一冊、一八一九～五七?年）等であり、加久関連の茶会記を記載したものは、「諸家茶事会席写」のみであることが確認できた。

(四)「北三井家資料」（三井文庫所蔵）

三井文庫所蔵の三井本家・連家関連資料のうち、惣領家である「北三井家資料」に分類されている、近世後期から近代にかけての各種茶会記の全てを通覧し、加久に関連する茶会記の抽出を試みた。具体的には、「安永・天明・寛政年茶之湯会附」（北一二八八。一七七三～一八〇一年）、「文化・文政茶之湯会附」（北一二八九。一八〇四～二四年）、「文政・天保年間茶之湯会附」（北一二九〇。一八二五～三七年）等であるが、加久関連の茶会記の記載は確認できなかった。

他方、「北三井家資料」に分類されている、北家六代当主・高祐（一七五九〜一八三八）の日記である「高祐日記」（全七七冊、一七九九〜一八三七年）を通覧し、加久関連の茶会記の博搜に努めたものの、確認できなかつた。

研究成果

本研究の成果は、逐次論文化を進める予定であり、ここではその概要を述べる。

（一）近世後期加久歴代の茶の湯への関与

近世後期加久当主のうち、茶の湯への関与が確認できたのは五〜九代であった。特に八代加久（一八〇六〜六九）は、表千家との関係が深いことが確認でき、表千家十代吸江齋宗左（一八一八〜六〇）への入門をはじめ、相伝の様子を示す史料が確認できた。すなわち、大坂の茶匠・勝間宗珉を取次とした吸江齋への入門（年次未詳三月）、同じく勝間を取次とした吸江齋からの茶通箱の相伝（年次未詳九月）、吸江齋からの乱飾の相伝（一八四六年初夏）、吸江齋からの皆伝（一八四八年八月二十四日）であった。

（二）近世後期加久の道具蒐集

次に、近世後期の加久の道具蒐集の実態を検討した。その際、史料の残存状況から、道具購入時に作成された史料（フローの状況を示す史料）を分析対象とし、「道具帳」や「蔵帳」等（ある時点のストックの状況を示す史料）を分析対象とした豪商各家に関する先行研究との差別化が図られた。

分析の結果、加久の道具購入は、断片的ながら一七六八〜九五五年に総件数二一五件、総額約銀七四六貫目（約金一二四三二両）に及ぶ規模であることが明らかとなった。

購入された道具の品目は、茶の湯に関するものが大半であったが、中には換金性に着目しての購入と推測される道具（刀装具等）も散見され、道具購入による資産形成が図られていたことが考えられる。購入先は、大坂・京都の道具商のシェアが金額・数量とも圧倒的であった。

ところで、廣岡家では、昭和金融恐慌による加島銀行の経営危機への対応として、一九二八（昭和三年）に同家コレクションの中核となる所蔵品の売立を行ったが、その際に売却された道具の一部は、既に近世後期に蒐集されたものであったことも確認できた。

（三）近世後期加久の茶会記

前述の「諸家茶事会席写」は、小石川三井家六代・高益（一八〇〇〜五八）による筆写とされる史料である。内容を検討すると、高益が参会した他会記ではなく、高益が諸方の茶会記を収集・記録したものと考えられる。本研究で分析した三井文庫所蔵資料のうち、近世後期の加久関連の茶会記は、この「諸家茶事会席写」にのみ見出せた。すなわち、七代加久が催した三会、八代加久が催した二会であった。このほか、加久の同族である廣岡五兵衛（一八二三年没の初代・正謙の可能性）が催した一会も、本史料に記載されている。他方、客として加久（同族を含む）が記載された会は見出せなかつた。

右の分析により、近世後期の加久関連の茶会記は、「諸家茶事会席写」に所載の五会、「宗猷様御代諸方茶事控」（個人蔵）に所載と推測される、一八〇四（文化元）年十一月二十六日の、六代加久が催したと思われる一会の、合計六会であることが明らかとなった。

ところで、「諸家茶事会席写」に所載の、加久が催した五会は、いずれも客組の記載がなく、一部を除いて開催場所の記載を欠いている。このように断片的な情報ではあるが、ここから示唆される七代・八代加久の道具選択に関する傾向としては、濃茶の茶碗に高麗茶碗を用いること、茶杓は表千家の歴代家元（同時代の家元も含む）の作に限られる、等が確認できた。

おわりに

本研究では、近世後期加久における茶の湯の実態を断片的ながら明らかにしたが、今後の課題としては、他の近世後期の豪商における茶の湯の実例との比較研究をとした加久の位置付けがある。さらに、本研究の継続的な展開により、近世茶道史における豪商の茶の湯の実態について、総合的なイメージの提示が可能と考える。

以下、今後の個別的な検討内容を示す。

① 加久の道具蒐集に関して、その蒐集対象や蒐集の性格について、先行研究で明らかにされている三井家・鴻善・平瀬家等の例と、ある程度の比較が可能となるであろう。この比較から、豪商の規模別による蒐集性の差異や、蒐集品のレベル（価格、購入先、作成年代等）、蒐集品の活用方法について、類型化が可能となると考える。

② 先行研究で部分的に指摘されてきたが、近世豪商間の、茶の湯を媒介としたネットワークの存在あるいは茶の湯による大名と町人等の身分横断的なネットワークの存在と実態について、具体的に明らかにできると考える。各家の茶の湯の実態の解明のみならず、近世豪商にとって、茶の湯がいかに機能して事業経営が行われていたかに関する考察も視野に入れ、研究を展開したく考えている。

③ 右の①・②から、近世後期の茶の湯と、近代の茶の湯との連続面および断絶面を、主に家元制度の担い手等の視点から総合的に考察するための、具体的な検討材料を得たく考えている。

1 廣岡家研究会「廣岡家文書と大同生命文書―大坂豪商・加島屋（廣岡家）の概容」（『三井文庫論叢』第五号、二〇一七年）。

2 清水実「三井家と茶の湯」（谷端昭夫編『茶道学体系 第二巻 茶道の歴史』淡交社、一九九九年）。

3 中野朋子「鴻池合資会社蔵「延寶乙卯三年 諸道具買帳」（『茶の湯研究 和比』第二号、不審菴文庫、二〇〇五年）。

4 田中豊「平瀬露香と大阪の茶の湯」（前掲谷端編『茶道学体系 第二巻』）。

5 こうした中で、近世後期の大坂豪商の茶の湯の実態を概観した谷端昭夫「江戸後期 大坂豪商の茶の湯」（『茶の湯研究 和比』第九号、不審菴文庫、二〇一五年）、江戸豪商仙波家の茶の湯を概観した依田徹「江戸豪商仙波家と仙波宗意について」（『茶の湯文化学』第二十七号、茶の湯文化学会、二〇一七年）のように、豪商各家の茶の湯の実態に着目した研究が展開されつつあるのが、近年の研究動向といえる。

6 「大同生命文書」解題（https://www.daido-life.co.jp/knowledge/research/pdf/130717_02.pdf、二〇二〇年二月二三日閲覧）。

7 前掲廣岡家研究会「廣岡家文書と大同生命文書」倉林重幸執筆担当部分、倉林重幸「大坂豪商・加島屋廣岡家と茶の湯―近世後期の道具蒐集を中心に―」（茶の湯文化学会平成三〇年度大会研究発表、二〇一八年六月一七日 於・松江市くにびきメッセ）。

8 このうち、一八三〇（文政十三）年正月二十四日正午に行われた一会（亭主：廣岡久右衛門、客：宗猷（山中宗猷）・伊兵衛（草間）・市郎兵衛）は、既に谷端昭夫氏によって六代加久の会と推測されて紹介されている（前掲谷端「江戸後期 大坂豪商の茶の湯」）。ここでは、七代加久の家督相続が一八〇七（文化四）年五月二十五日であることから（前掲廣岡家研究会「廣岡家文書と大同生命文書」）、同茶会を七代加久の茶会として考えた。

9 前掲谷端「江戸後期 大坂豪商の茶の湯」において、「久右衛門は（中略）分家の廣岡五兵衛や加島屋角兵衛、専介らを招いて、「清拙正澄墨蹟 東山横物」と書かれる掛物や井戸茶碗、覚々齋作茶杓銘「トシワスレ」などを使った茶会を行っている」と紹介されている一會。